

ウサギのハイとの別れ（死）が子どもに残したもの — 幼児期に継続飼育を体験した小学生の語りを通して —

鍋島 恵美¹⁾・光村智香子²⁾・高野 史朗²⁾

Children's Grief Regarding the Death of the Rabbit They Had Raised in Kindergarten — An Analysis of Expressions Made by Elementary School Students —

Emi NABESHIMA, Chikako MITSUMURA and Shiro TAKANO

抄 録：こどもが近親者の死を経験することは、死を理解することや命の大切さを実感する重要な経験であると考えられる。しかし、近年、核家族化が進み、こどもたちが家庭内で近親者の死を経験することはほとんどなくなってきていると言われている。また、終末期を病院で迎える人も多く、死を看取することも少なくなっている。このような現在の社会の文化状況の中で、生と死、命の大切さについての教育を保育や教育現場でこどもたちに保障することが重要課題となっているのではないだろうか。そこで、私たちは、ひとつの『いのち』との出会いを5歳児のこどもたちと相談して決め、2007年度9月からウサギ2羽を他園から譲り受けて継続飼育に取り組み始めた。育てる中で、そのウサギがこどもと共に暮らす仲間になっていった。2羽のウサギの赤ちゃんがこどもの手の内で誕生するというできごとに遭遇もした。命をつなぐために、休園日には保育者の家からこどもの家へとウサギのホームステイも始まった。5歳児の修了と共に誕生した子ウサギは1羽（「ハイ」と命名）を幼稚園に残し、後の5羽はこどもの家庭で育ててもらうことになった。親ウサギと1羽の子ウサギの飼育は、2008年度以降も筆者の一人である光村を核にして子どもたちに引き継がれていた。その中で迎えた親ウサギの死。そして、2012年度7月に訪れた子ウサギ「ハイの死」。それを知った当時の5歳児（現5年生）が隣接する小学校から駆けつけてきた。筆者たちと共に別れの場に立ち会い、手を合わせ静まり返ったその場で「ハイへ」と呼びかけたメッセージカードが自主的に綴られた。そこには、感謝、慈しみ、悲しみ、寂しさ、辛さ、思いやる気持ち、親子の絆など、過去を振り返り死後の世界へ目を向けた思いが記されていた。

キーワード：ウサギ、いのち、死、慈しみ、飼育体験

I. はじめに

幼稚園では、飼育活動の実態が多く見られる。それは、幼稚園教育要領総則第1「環境を通

1) 元京都教育大学附属幼稚園 2) 京都教育大学附属幼稚園

して行う」ことを幼稚園教育の基本としており、直接体験の重要性と、その経験の積み重ねの中で物事を分かっていく過程を大事にするからである。特に、飼育活動に関しては、領域「環境」の内容(5)「身近な動植物に親しみを持って接し、生命の尊さに気づき、いたわったり大切にしたりする」とある。本学附属幼稚園では、1950年代から飼育活動は保育の中に取り入れられてきた。2003年に文部科学省が全国の幼稚園・小学校に配送した飼育手引書「学校における動物飼育の在り方」に、飼育動物対象としてニワトリ、チャボ、ウサギ、モルモット、ハムスターが取り上げられているが、本園では、ウサギの病死(耳疥癬病)を迎えて以降2000年度からはウサギの飼育が途切れていた。そこで、2007年度において、ウサギの飼育がこどもにとって有意義であることから、筆者らを中心に園内の教師の飼育に関する意思疎通も十分になされ検討された結果ウサギの飼育再開に踏み切った。

筆者らは、2007年度から2011年度と「ウサギと共に暮らす日々のできごとから学ぶ」をテーマに実践研究に取り組んできた。2007年度の研究では、「ウサギの飼育の保育を通して」をサブテーマに取り組み、ウサギの飼育をめぐる物語が『1. 子ウサギとの出会い・飼育する環境を作る・そして、ウサギの名付け 2. ウサギとの遊び場を作る 3. “ウサギとの遊びの場を作る”その遊びの広がり 4. ウサギの出産と死のなかで 5. つながる命との出会い』と展開した。そのできごとのなかで、こどもは、期待に弾む心、親しみ、愛着、驚き、慈しみ、喜び、心配、不安、悲しみといった様々な感情のうねりや情緒的な体験を豊かにしていくことが明らかとなった。この情緒的な体験は、「心情・意欲・態度」を育む幼児教育にとって大切なことはいままでもなく、このような豊かな体験こそが、実は他方で「なぜ?」「どうして?」「どのように?」「どうすれば?」といった問いや工夫を引き出す契機となり、まさに、それは科学する心を培っていく基盤となると提言した(2009年度ソニー幼児教育支援プログラム「科学する心を育てる」、本学環境教育研究年報第18号)。2010年度は、「ウサギ物語の語りから」をサブテーマに、保育者を核として園児と卒園児(小学生)とが織りなす、誕生した子ウサギの継続飼育の物語を語った。そこでは、就学して書き言葉を習得した1年生の中で、幼児期にウサギと親密だったこどもが、保育者に代わって世話を手際よくしたり、誕生カードや絵本を作成したりして、自ら飼育したウサギや園児へ飼育を託す思いを生き生きと語り継ぐことが分かった。幼児期にウサギと触れ合い共に生活をしてきた感情体験の重要さとともに、継続飼育の経験が連続して学習へと高まっていく様子を知ることとなった(本学環境教育研究年報第19号)。これらの研究を進める中で、「継続飼育」という言葉がキーワードであることが分かってきた。そこで、「継続飼育-教師と子どもと保護者とともに-」をテーマにして、2007年度から2010年度までの実践を第13回全国学校飼育動物研究大会でパネル発表をした。そこでは、幼児期に体験したウサギとの思い出を心に、ウサギと教師との情緒的な深いつながりを卒園後も育んでいること、飼育を引き継いでいる園児にもその思いは引き継がれていること、ホームステイや子どもからの情報からウサギの保育が家庭へも受け継がれていることが分かり、継続飼育は「心をつなぐ・人をつなぐ」ことを提言した。幼児の飼育する心は、保育者はもとより家庭のおとなのかかわりが重要であることや親育ちとしても重要な意味を持つのではないかと考えるようになった。そこで、2011年度研究は、2008年度から2011年度にかけて実践してきたホームステイを取り上げて「ホームステイの語りから」をサブテーマに研究した。そこでは、

継続する飼育の命はこどもが家庭へとつなぎ、親は個人的な飼育日誌を通して次の親へとつないでいくことや、その過程の中で、親は自ら親としての主体性を形成することが分かった（本学環境教育研究年報第20号）。

本稿では、継続飼育されてきたウサギのハイとの別れ（死）を2012年7月に迎え、その別れの場に立ち会ったこどもたちとともに今までの実践を振り返ってみたい。

Ⅱ. 研究目的と方法

1. 目的

本研究においては、幼児期に『いのち』との出会いと別れを体験したこどもが、小学校5年生になって出会う『飼育していたウサギのハイとの別れ（死）』を、どのように受けとめ見送ったのか、別れ（死）がこどもたちの心に残したものは何なのか明らかにするとともに、今後、幼児に対する命に触れる体験をいかに実践していくかについての方向性を示すことを目的とする。

2. 方法

①幼児期から小学校入学後にわたり、継続飼育されたウサギにまつわるエピソード記録を時系列に沿って整理する②ハイとの別れの場にのぞんで自主的につづられたメッセージカードを資料とする③そのエピソードやメッセージから、こどもが味わった感情体験がどのように行動や言葉に表れているのかという観点から読み取っていく。さらに、何人かの子を縦断的に追跡して発達的な視点から検討する。ここでのエピソードは、筆者（保育者）が記録したものであり、5領域の保育内容の観点がその中に埋め込まれている。観察者が記録するエピソードとは違い保育者の主観性が高いと考えるが、その点は、一緒に実践をしてきた筆者らがそれらのエピソードを読み解き検討した。

記録対象期間 2007年度、2008年度、2009年度、2010年度、2012年度

観察場所 幼稚園の保育室・遊戯室

Ⅲ. 実践の経過と考察

1. 2007年度 5歳児の頃

(1) ウサギのクロの出産と子ウサギの死のなかで

エピソード1 ウサギの家で弁当を…ウサギのこどもとウサギ 2008/02/12

こども劇場へ向けての生活の中で、自分たちのやりたいもので場を作り、弁当を食べることになる。ウサギになりたいリノ・カナ・マホ・ナルミとナナコ・カナコ・エマ・スズリがウサギの家へやってくるが、2グループに分かれて食べる場を作り始める。保育者（筆者）「ウサギの家はひとつなのでこちらへどうぞ」とナナコたちに声をかけると「だって狭いし入るとこない」とのこと。リノたちにも入れるよう考えても

らうと、向かい合わせで食べられるよう場をあけてくれる。4人ずつ向かい合って食べる。カナ「シロとクロも連れてきていい？」とのことから、シロとクロの家作りも始まる。

エピソード 2-i こどもの手の中で誕生 2008/02/14

いつものように朝の世話を終え、ヨシカ・リノがシロとクロを遊戯室のウサギの家へ連れて下りる。トイレや餌も下ろして家を整えながら、クロが近づいてくるシロに「ぶうっ！」と声を出し、怒ったように引かく様子が目に入る。普段と違う姿に保育者「なんか怒ってるね」と不思議に思い、保育者「そんな怒らんでもいいの」とクロをなだめるように声をかけ、ヨシカ・リノと顔を見合わせる。



ヨシカ「抱っこしていい？」保育者「いいよ」とクロを抱っこし、リノも隣でその様子を見ている。クロがヨシカの腕の中で動き、おなかを上にしてひっくり返るとヨシカが大きな声で「先生！クロにおちんちんがある！」と叫ぶ。リノも驚いた顔。保育者も「えっ！？（クロってほんまは男の子やったん！？まさかそんなはず…）」と驚いてクロのおなかを見ると、たしかに膣から棒のようなものがちらっと出ている。保育者「え～っ！？」とよく見ようとすると、突然ニョキーッと勢いよくその棒が伸び、棒の先に指らしきものが付いている。保育者「赤ちゃんやっ！！」。ヨシカも目をまるまるさせている。保育者「ヨシカちゃん、そ～っと下ろそか…」と驚いてクロを下におろす。保育者「エミ先生呼んできてー！！わらも持ってきてー！」と周りのこどもたちを伝令に出す。

写真 1 赤ちゃん誕生

その間に1羽生まれる。ヨシカ・リノの顔が興奮（きつと私もそうだったろう…）している。エミ先生「まだおなかにはいるはずだから！」と段ボールで小さな母屋を作り、屋根を付け、暗くてそっとできる環境を整える。たくさんのこどもたちが周りを囲み「ちっちゃいなあ！」、タケル「ねずみかと思った…」「耳はまだ短いんやなあ」「（心配そうに）目が開いてないで」保育者「人間の赤ちゃんも生まれた時、目は見えないんやで」「ふ～ん」、リカ「あ、ちんちんあるし男の子や！」保育者「それ、たぶんへその緒違うかなあ？」「（残念そうに）一緒に遊べるのは僕らが小学校行ってから



写真 2 「静かに クロより」との看板

やなあ、だって大人になるまで3か月かかるんやろ？」など初めて見る（私も！）生まれたての赤ちゃんに興味津々で口々に話すが、声を小さくするよう促す。一方、自分の毛をむしるクロをじっと見つめアカリ「痛いなあ…」と気持ちを代弁したり、血のついたお腹を見てリカ「うちのお母さんも赤ちゃん産んだ時血ついてたで」と自分のお母さんと同じだと気づき周りのこどもたちに教えてくれたり、と赤ちゃんを産み、守るためのクロの姿に心を寄せるこどももいた。出産準備を整え遊戯室を出る。先に生まれた1羽は触らずそのままにしておくことにし、クロに任せるが心配。

ひと段落してほっとするとヨシカ・リノと顔を見合わせ3人で「びっくりしたなあ、びっくりしたなあ」「うん、うん」と興奮を分かち合った。

『うさぎのあちゃんがいます。しずかにしてください』と紙に文字と絵を描き、遊戯室のドアに貼っておこうとする。一緒に見ていたリノが「“くろより”って書いた方がいいんちゃう？」と提案、リカ「あ、そうやな！“くろより”」と書き加える。

保育室ではカナたちがたくさんのキャベツをハサミで細かく切り、丸い台にのせたおいしそうな“おめでとう”のケーキができ上がり、母屋の傍にそっと置かれた。シロも自分の赤ちゃんが見たいだろうと、ケーゴとクロのいる遊戯室に引っ越した。



写真3 誕生祝のケーキ作り



写真4 完成したケーキ



写真5 クロのもとへ

エピソード2-ii お見舞いに… 2008/02/15

翌朝、登園するとその足で遊戯室へ向かうリノ。リノ「お見舞いの花束、作ってきた」と折り紙で作った花束を渡してくれる。クロに見えるよう、柵の入口付近に飾る。ヨシカも朝出会ったときから「抱っこしてたら生まれたなあ！」としっかりした口調で、思い出しては嬉しそうに話す。

ミカ「あの子、どうなった？」と最初に生まれた赤ちゃんの話が出てくると保育者「うん、やっぱり寒くてあかんかったみたい…」と亡骸を見せる。こどもたちと一緒に動物たちの慰霊碑の元に埋めに行く。途中、さみしくないようにきれいな花と一緒に埋めてやりたいことを伝えたとナルミ「探してくる！」と2階へ走っていき、ピンクのサクラソウを少し切って持ってくる。何種類かの草花と固形のえさを箱に入れてやる。「天国に僕のおばあちゃんいてるし大丈夫やで」と安心させてやる姿もある。

エピソード2-iii トシヤの布団 2008/02/18

登園後、母と共にトシヤが遊戯室へやってきて、赤ちゃんのための手編みの布団を見せてくれる。トシヤ「土曜日と日曜日とずっとしてん、しんどかったわ！」と疲れたような、照れくさいような顔。本当は母屋に敷いてやりたいと思っていたようだが、生まれたばかりの赤ちゃんに人間の匂いがつくとクロが赤ちゃんを育てなくなってしまうかもしれないことを伝え、クロが持っていってくれることを期待しながら、ぽんっと柵の端っこに入れる。



写真6 届いた布団とマフラー

今日の“こども劇場”ではタイガが男児でたったひとりウサギになる。喜んで遊ぶが、出産の場面になるとステージの上へ戻り恥ずかしそうに座っている。

保育者「お父さん、しっかり見守ってくださいね！」と声をかけるとうなずいて見ている。

エピソード2-iv ユリアのマフラー 2008/02/19

トシヤの布団を見て何か思ったことがあったのか、この日はユリアが母と共に遊戯室へやってきて手編みのマフラーを赤ちゃんに、と持ってくる。言葉はあまり出てこないが、自分ができることで何かしてあげたいと思ったのだろうか？

最初の1羽を除き、残りの6羽が全て元気に生きていることがわかり、ひと安心。

エピソード2-v 見守る心-自制心- 2008/02 下旬～03 月上旬

登園後、ヨシカ・リノ・ミカ・リカ・ユリア・トシヤたちは赤ちゃんが大丈夫かどうか心かけ、遊戯室へやってくるまで重なって母屋に隠れたり、クロの下にもぐっておっぱいを探したり、間違えてシロのおっ

ばいをもらいにいったりする姿を柵の上から「かわいい～」とುತ್ತり頭を並べて見ている。その姿もまたかわいい。まだ赤ちゃんだから、と早く抱っこしたかったり一緒に遊びたかったりする自分たちの気持ちをおさえ、元気に大きくなるのを願うとともに楽しみにしている。



(2) 生まれた命との出会い

エピソード3 子ウサギの行方

写真7 育つ子ウサギ

3月18日の修了式を前に、シロとクロや6羽の赤ちゃんウサギの世話をどうするのか話し合った。ミカ、リカやリノたちは「小学校に連れて行きたい」と言い出した。私たちは、自分たちで守っていける力を付けたこのこどもたちに託したいと願った。そこで、進学先の小学校との交渉を私たちがするのではなく、自分たちで進学先の先生に交渉するようにとの思いをもった。ミカたちに、「小学校に行って、先生が決まったら、その先生にみんなからウサギが飼いたいことを頼んでみたらどうかなあ」と提案した。それまでは、幼稚園で育てていくこと、赤ちゃんウサギは6羽共には育てられないと話し、1羽は幼稚園に残し5羽のもらい先を探すことにした。

ホームステイを体験していた家庭からの申し出や、何度となく親子で話し合いを重ねて諦めるこども（ショウ）もいた。自分は飼いたい父親を説得できなかったと諦めるのは、こどもばかりではなく、母親もそうだった。まず最初にシンの家庭へ、次にリカの家庭へ、次にタツヤの家庭へ、次にケイスケの家庭へ、そして最後の1羽は3歳児の家庭に引き取られていった。幼稚園に残ったウサギの名前は、クロとシロのこどもなので“ハイ”と名付けた。

修了式を前に一週間をかけて次に進級する4歳児に世話の仕方を伝えていった。そうして、2008年度からは、新5歳児がシロとクロの世話をするようになった。こどものハイは、今まで一緒にこどもと世話をしてきたチカコ先生が受け持つ3歳児で飼育が引き継がれた。

考察1

・保育者と共にウサギの飼育に取り組み、飼育動物のウサギだったのが一緒に暮らす中で、自分たちの仲間になり、偶然に遭遇する子ウサギの誕生と死、そして就学を前にウサギの飼育を他者にゆだねていく体験から、こどもたちは、期待に弾むころ、親しみ、愛着、驚き、慈しみ、喜び、心配、不安、悲しみといった様々な感情のうねりを経験していることが分かる。このかけがえのない経験こそが、当初に述べた幼稚園教育要領領域「環境」の内容(5)「身近な動植物に親しみを持って接し、生命の尊さに気づき、いたわったり大切にしたりする」ことである。

・幼児期に、命の鼓動や肌のぬくもりを直接感じられる生き物とふれあうこと、飼育しつつ保育者が生き物の代弁者としてこどもにかけける言葉を耳にすること、飼育することで自分たちが疑似的に育児体験をすることは、主体的な経験とともに相手の身になって考えたり相手に寄り添う経験もできていることが分かる。

2. 2008 年度 1 年生になって

シロとの別れ（死）・ハイとの再会

エピソード 4 シロの死のニュースを聞いて 2008/5/4

シロが亡くなったニュースは、在園児の家族から卒園児の家族へと流れた。ウサギを引き取って育てているシンと母が「シロが好きだったものです」と、ホームステイの時によく食べたニンジンとパセリを動物の慰霊碑の前に供えてお参りに来てくれた。その後も、同じくウサギを育てているリカやタツヤやケイスケも家に咲いている花を摘んでお参りに立ち寄ってくれた。彼らはお参りを済ますと、園庭の遊具で遊んだ。母親と私たちは立ち話でシロを偲んだ。1 年生の間でこどもたちからもそのニュースが広がり、帰りに立ち寄ってくれるこども（ミカ、カナ、ショウ）がいた。

エピソード 5 久しぶりのハイとの再会 2008/06

ハイの出産に立ちあい親ウサギのシロ・クロと共に過ごした 1 年生が交流活動で幼稚園を訪れる機会があり、ミカ「ハイや～！かわい～！」ナルミ「なつかし～！」とかかわる。カナ「（トイレ）まだやん、やったげよか？」と聞いてくれる。私「ありがとう」と頼むと「（汚れたシート）入れるとどここ？」「拭くものは？」「シートどこ？」と次々に準備し、てきぱきと換えていく。3 歳児のこどもたちはその勢いに圧倒されてじっと見ている。掃除が終わり、1 年生の人数も減ってくると 3 歳児も再びケージの周りへハイの様子を見にやってくる。1 年生と直接話することはなかったが、ハイとの久しぶりの対面を喜ぶお兄さん・お姉さんの賑やかな雰囲気をも 3 歳児も感じている様子がよくわかった。

エピソード 6 絵本を贈る 2008/06/04

小学校からの帰り道に、カナ「これ（きく組のこどもたちに）読んだげて」と『うさぎのきょうだい 文：井上かな え：井上かな』と書いた絵本（資料 1）を持ってくる。絵本を 3 歳児



と一緒に見た後は、身近に置いておいた。

絵本を作ろうとした思いや、学習したばかりの書き言葉での表現に接することができる保育者としての幸せを感じずにはいられなかった。親ウサギのシロとクロと共に育ちうさぎの誕生に立ち会い慈しんだカナだからこその思い

写真 8 届けられた絵本

であろう（詳細は本学環境教育研究年報第 19 号 pp.25-26）。

エピソード 7 誕生カードや贈り物を届ける 2009/02/14

ハイの 1 歳の誕生日に小学校 1 年生のカナから「かわいいうさぎへ …あえないけどわたしがちいさいころのおもいでがいっぱいで…」と綴られている手紙と、ハイの兄弟のチョコちゃん（1 年生のシンが家庭で飼育）からの手紙（母親の代筆）とニンジンが届く。

る近くに埋葬することにした。すると、掘っているときにシロの骨が出てきた。驚いたこともさることながら、ずっと世話をしてきた光村が、「よかった・・・シロが迎えに来てくれた」と涙した。こんな先生の感性と共に暮らしたこどもの幸せを感じた。亡くなったニュースは、在園児の保護者から当時のこどもや保護者にも伝わり、花を供えてお参りする家族が訪れた。

エピソード9 お参りに行く

6月15日（月）クロが死んでしまったことを聞いて、小学校の帰り道にリカ・ミカ・タツヤ・ケイスケ（小2、リカ・タツヤ・ケイスケはクロのこどもを飼っている）がやってくる。保育者が「お参りに来てくれたの、ありがとう。病院でお薬もらってちょっと元気になってきたと思ってたんやけどねえ…」と病気の話をしながら動物の慰霊碑の前まで行く。ミカ「1匹死んだなあ、おんなじとこやなあ！」保育者「そうやったなあ、最初に産まれた子が居てるところやなあ」タツヤがランリュックからナイロン袋に入った餌を取り出す。保育者「ありがとう、ちょうどハイのお茶碗があるわ」と取りに行き、テラスで餌を入れ換える。

みんなで慰霊碑の前に餌と持ってきた花を供え、手を合わせる。ミカ「（リカに向かって）あんた手紙持ってきたやん」リカ「ええ～（少し照れくさそうに）」保育者「そうなん、読んであげて、クロも喜ぶわ」リカ「ええ～（照れてだらーんとする）」ミカ「読みいな～！」リカ「あんたが読みいな～！」と言いながらもランリュックから手紙を出し、慰霊碑の前に向かい合う。ミカ・タツヤ・ケイスケ・保育者は少し後ろで聞いている。リカ「『クロちゃんへ シロちゃんもしんでしまっとうとうクロちゃんまでしんでしまいました。これまでありがとう』」と読み上げ、慰霊碑に供える。リカの手紙を聞いて保育者「ほんまにいろいろありがとうやったなあ…」と今までのクロの姿を頭に思い浮かべながらつぶやく。ミカ「抱っこしてたら産まれたなあ！あれ、リノちゃんやったっけ？」とクロの出産を思い出

した様子。保育者「ちゃうちゃう、ヨシカちゃんや、ヤマモトヨシカちゃん」ミカ「あ、そうか！あの～、水に葉っぱ入れて固まるかな～？ってやってたなあ」保育者「そうそう、クロとシロのおうち作ったとこでなあ！寒い時やったしなあ」ミカ「でも固まらへんかったん」保育者「そやったなあ」と思い出話をしながらハイのところ（東側テラス）へ向かう。その間、タツヤ、ケイスケは雲梯で遊ぶ。リカ・タツヤ・ケイスケは東側テラスのころころすべり台で遊び始め、ハイはそばの垣根のサザンカの下に寝そべっている。リカ「うちのミミちゃん（もらって飼育しているウサギ）、ぶっちゃい（太い？）ねん」と言いながら滑る。リカ「そやしお医者さん行ってる」ミカ「ほらほら、ハイ見てるで」リカ「どどこ？ほんまや！」タツヤ「ハイどこ？」保育者「そこ（指して）に寝てるよ」タツヤ「ほんまや」と覗きこみ、再びすべり台で遊び始める。

6月16日（火）ショウ（小2）が登校前に花を供えにくる。母親がクロを可愛がっていて、子ウサギも飼いたいと思っていたが、家の事情で飼えなかった。母親が花を持たせてくれる。

6月17日（水）小学校の帰り道、シン・ユウダイ（小2）が小学校からの友だちを連れて、花を供えにやってくる。慰霊碑に花を供えると、雲梯で遊び帰っていく。



写真10 別れの手紙

エピソード 10 夏休みのホームステイを迎える前に 2009/7/19

シン（小2）の母から、ハイの毛を散髪しに来てくださる（2月14日生まれのウサギなので“チョコ”と名付けて育てている家族）。チョコを可愛がって育てておられ、毛が生え替わる時期にウサギの散髪をしてくれるところを探して連れて行かれたとのこと。そこで、何回か散髪をしてもらううちに自分でもできるようにマスターされたとのこと。専用ブラシを持って膝にハイを抱いてイチヨウの木陰で散髪をしてくださった。



写真 11 チョコを育てる母と

エピソード 11 届くはがき 2008-2009

卒園したモエカ・タカオ・マヒロ・ナホ・ミカから届く季節の頼りには、「シロはげんきですか?」「クロはげんきですか?」「ハイはおおくなりましたか?」と必ずウサギのことが尋ねてある。シロやクロの死を知らずにいるこどもには、その事実を伝えるとともに元気に暮らすハイの現況をデジタルカメラで写真を撮って写真付きのはがきで返事を書くことにしている。こどもとウサギを通したやりとりを重ねられることを幸せに思うと同時にウサギ物語を語り続けたいと願っている。

考 察 3

・クロの死のニュースを知り、2年生になった10名ほどのこどもが放課後にお参りに来る。その中に家庭でハイの姉妹を育てている4名がシロの死の時と同様に来ている。その中のひとりの女兒は、自らクロの死を悼み送る言葉を書いてきており、保育者から促されて、恥らいつつも墓標の前で読み上げた。そこでは、育てた親ウサギ2羽が亡くなった事実と寂しさと感謝が語られた。死を悼み参るという気持ちを支え行為を引き出すことには、身近にいるおとなの気遣いが大切であることがこのエピソードからも分かる。

・墓標を前に、担任だった筆者と共にハイが誕生した時のことが思い出話としてたち上がった。ハイの姉妹を育てているこどもは、そのウサギの今の様子を伝えたりと、こどもと共に生きているウサギとの時間の流れを感じ取っていることが分かる。このような語りから、命あるものと共にした時間（生）を感覚的につかんでいくと考える。

4. 2010年度 3年生になって**新しいのちに触れる**

シロとクロを亡くした後の寂しさや、5歳児の継続飼育の大事さを実証してきているので新たな5歳児にもその経験を育みたいとの願いから、新たに仲間を迎えることになった。2010年5月に日本獣医師会の皆さんの協力を得て新たに子ウサギの仲間を3羽（ウメ、サクラ、パントと命名）迎えた。そのニュースはすぐに小学校へも伝わっていった。

エピソード 12 可愛すぎて帰れへん 2010/05/13

リノ「ウサギ見にきた」と一人で園にやってくる。子ウサギを見るとリノ「可愛い～」と赤ちゃんを見たときのような笑顔が出る。リノ「抱っこしていい?」私「いいよ、まだ赤ちゃんやし座ってね」リノ「わかった」とケージの中に恐々手を入れる。ケージの中で子ウサギが動

くと、リノも驚いて手を引っ込める。あんなにウサギと一緒に過ごしてきたリノがなかなか抱っこできないので、相手が小さすぎて躊躇しているのかと思いきや、リノ「久しぶりやし、抱き方忘れた」とのこと、私「そうか、もうずっと抱っこしてないもんなあ、ほらほら、お腹とお腹を合わせて…」といいながら子ウサギをリノのひざに乗せる。一度抱くと思ひ出したようにリノ「可愛い～」と片手で撫でながら抱っこする。ずっと抱っこしていたリノに、私「もうそろそろ帰る時間やなあ」と声をかけると、リノ「あかん、可愛すぎて帰れへん」となかなか子ウサギから離れられない。私「また今度おいで」リノ「いいの？」私「いいよ」と約束をして帰る。

エピソード 13 悲しかったから… 2010/05/24

リノとナルミが学校の帰りにやってくる。リノ「今どこにいるの？」と尋ねてくる。「パンタ（8ヶ月）は私の家、ハイは5歳児のマサシくんの家で、ウメとサクラ（2ヶ月）はまだ小さいから幼稚園にいるよ。マサシくんの家からは大雨やからもう一日預かってくれるって電話があってね…」ナルミ「いつも連れてくんの大変やなあ」リノ「でもお母さんいはるしなあ」ナルミ「でも（休園で幼稚園が）1日ないし、長いこと（一緒に）いれていいなあ」とホームステイの大変さと楽しさの両方を感じている。

しばらく話した後、私「じゃあね」と送った時ふいにナルミが振り返り、ナルミ「ほら、今日、私たちちょっと目、赤く腫れてへん？」と言う。リノはナルミに「そのこと言うの」と驚いたように目配せを送っている。ナルミ「あんな、今日、教育実習の先生とお別れやって、悲しくて泣いてしまっただけ。そやし気分転換にウサギ見よかな、と思って」と。言い終わるとナルミとリノ「じゃ」と手を振って帰っていく。私「またね」と見送る。

考察 4

・新たな子ウサギが園にいるニュースを聞いて、寂しさや悲しみの「気分転換」をしようとウサギに会いに来ている。幼児期にウサギと触れ合うことで楽しかったり、ほっとしたりした（癒された）体験が想起されての行動であろう。幼児期の飼育体験は自らの心を守る（命を守る）糧にもなっているのであろうと考える。

5. 2012年度 5年生になって

ハイとの別れ（死）に寄り添う

ハイは、春になり亡くなった母親のクロと同じような症状があらわれ、体調がすぐれなくなっていった。看病をする保育者（光村）とこどもたちの思いが伝わったのか一時は回復の兆しを見せたものの7月5日の夜に亡くなった。誕生からずっと一緒だった光村から、3年間一緒に暮らして今は2年生になっている子どもたちにハイの死を伝えて一緒に見送ってほしいとの願いが小学校の担任に伝えられた。先生からハイの死を聞いた2年生は、ハイへの手紙や絵をかいいて放課後に次々とお参りにやってきた。彼らが帰った後には、あわてた表情で5年生がそのニュースを聞いて駆け込んできた。彼らは、ハイの亡骸を見ると、表情がこわばった。手を合わせて拝む子、ハイの体をそっとさすってやる子、涙ぐむ子と、今までのこどもとは違い悲しみが漂い静寂さがその場に広がっていった。筆者たちもその彼らのハイに寄り添う姿を観てい

るうちに「ありがとう」「ありがとうね」と言いつつ泣いてしまった。訪れたこどもらは、2年生からハイへ送られた手紙を読み始めるうちに、自分たちもハイへ手紙を書きたいと言い出した。筆者が、急きょ用意したカードにこどもたちは、自らハイへの思いを厳粛な雰囲気の中で黙々と綴っていった。その時のメッセージを次に原文のまま記述する。幼児期にウサギの継続飼育の中で、深くかかわっていたと筆者らが感じているこどもの語りから配列していく。

表1 ハイとの別れ（死）に綴られたメッセージ

① はいへ

わたしが年長のときでしたね。あんなに小さくてかわいかったのが、毎年毎年見ているうちに大きくなって美しくなっていくね。すごく楽しかった。「はい」みんなにかわいがられて楽しかった？うれしかった？言葉はわからなかったけど、その分いっぱい走りまわって「楽しい」ってすがた見せてくれたね。ありがとう。今までずっと本当にありがとう。くろママとしろパパと天国でずっとなかよくくらしてね。パンちゃん、さくらちゃんによろしく。さくら組 ミカより

② はいへ

いままでありがとう。一緒に遊べてよかったよ。はいを見るといつも楽しくなったよ。これからも見守ってね。カナ

③ はいへ

いままでありがとう。あまり会えなかったけど、小さいころはよく遊んだよね。小さい目がとてもかわいかったよ。みみ（ハイの姉妹）もはいの分まで生きるからね。ありがとう。大好き リカ

はいへ

ありがとう 私とは、生まれてからずっとはなればなれだったからよく顔をおぼえていないけれど、姉妹どうしつながっているね。天国に行っても元気でな～ みみより（リカの代筆）

④ はいちゃんへ

ひさしぶり。私のこと覚えていますか？ 私が年長のころ、いっしょに遊んでくれてとてもうれしかった～ はいちゃんは、私のベットみたいで、いつもかわいがっていたのをおぼえています。友だちと遊ぶより一人で、いつもにこにこしていたのを覚えています。今日、はいちゃんに会って、今までのことが思い出しました。とても悲しかったけど、はいちゃんにあえてとてもうれしかったです。はいちゃんは、天国にいますが、天国いや空の上で、私たちを見守ってください。私たちは、空の下からはいちゃんを見守っています。はいちゃんには、亡き父、母（シロとクロ）がいるけどシロ、クロにもうすぐ会えるね。はいは天国に行っても大じょう夫、こわくなんかないよ本当に本当に私たち、先生たちが見守っているよ。はいが生まれて5年たったけど、はいは私の一生の宝物だからね。絶対はいのこと忘れないよ。はい。ありがとう！大好きだよ！ リノ

⑤ ハイちゃんへ

今までありがとう♡ 元気なハイちゃんが天国に行くなんて、思ってもいなかったよ。2年生の先生に聞いてびっくりしました。私の妹も「はいちゃんかわいい」といってたよ♪ 私は、ハイちゃんのこと一生わすれないよ。ハイちゃんも一生わすれないでね♥ ハイちゃんがいなくなると、ようちえんがさびしくなるな。だから天国で私たちやようちえんを見守っていてね☆ ハイちゃん 本当にありがとうね ナルミ

⑥ ありがとう ハイちゃんへ

今まで本当にありがとう !!! 天国に行っても私たちを忘れないでね。そして、元気にいてね!

私は、100 年後になっても、ずっとハイちゃんの事忘れないよ。5-2 ユリヤより

⑦ はいちゃんへ

今までありがとう 抱っこの仕方がへただったり、いたいこともさせてしまったけど、ずっと好きだったよ。会えなくなるけど、ずっとずっと大好きだから、天国で待っていてください。いつか会えますように。おおきくなったよ! 大好き 「いつか会えるように(短冊の絵に表記)」11 才のモナ

⑧ はいちゃんへ

あんまり会えなかったけど、大きくなった私たちをいつも見守っていてくれてありがとうごさいました。はいちゃん、天国でみまもっててください 5-1 今まで本当にありがとう 10 才の Y.N. より

⑨ ハイへ

天国でも元気でね Y 僕の弟より

⑩ はいちゃんへ

天国でも元気で 本当に今までありがとう いいねむりを 5-1 H.Y.

⑪ 天国でもおげんきで 今までありがとう さようなら S.T.

⑫ ハイちゃんへ

私たちの年長の時にはじめてあったね 天国でもげんきにいてね 応援してます 5-1 I.S.

⑬ はいへ

あんなに小さかったはいがこんなに大きくなっていてびっくりしました。天国でもゆっくり休んで元気にシロとクロと楽しくいてね。また、ちょこちょこようち園に顔出しに来るね。ありがとう。I

⑭ ハイちゃんへ

今までありがとう。きみとであった日のことがなんだかきのうのように思えてきます。ほくらは、これからも、ずっとハイちゃんのことをわすれません。ありがとう Y.H.

⑮ はいちゃんへ

天国でも元気でね F より

⑯ はいちゃんへ♡

ひさしぶり。そしてさようなら。私たちがもらったシロとクロ。はいの親だね。はいが生まれた時、みんながうれしかったよ。ずっと会いたくて、学校の先生から亡くなったと聞いて、とてもさみしくなりました。つめたくて、動かなくて、目をとじてしーんとして、ハイとの思い出を思い出して書いたよ。涙がぼろぼろ出たけど、シロもクロもハイも T.R. の心の中に、6 年になっても、中学になっても、大人になっても、ずっとあるから。ハイも、T.R. や友だちを忘れないでね。きっと、ずっと前に亡くなった、父のシロ。母のクロのところに行きたかったんだよね。天国で、シロとクロと、ハイでみんなを見ていてください。今までありがとう。おつかれさま。ゆっくり休みながら見守っていてね。シロもクロもハイも大好きだよ。悲しいけどこれが現実。うけとめられないけど だいじょうぶ。もう一回。みんな大好きだよ。天国で、みんなのメッセージ、シロとクロに伝えてね。ずっと心の中にいるシロとクロとハイへ T.R.

⑰ ハイちゃん 大好き どのウサギよりもかわいいと感じたよ。

ハイちゃんへ たん生日同じだからね 私は、ようちえんちがったけど、小学生になってハイちゃんを見たよ。ふわふわしてかわいいね♡ 元気でね。ありがとう M より

考 察 5

・多くのお参りに訪れた 5 年生の中での 17 人の子どもの綴りである。そこには、幼児期にハイと一緒に遊んだことを思い起こして「楽しかった」と語り、「ありがとう」と感謝の気持ちを誰もが表現している。別れることを「さびしい」と語り、ハイが向かう先を「天国」と捉えつつも死後の世界に対して「怖い」という恐怖感をもっていることが分かる。恐怖感を乗り越える思いを「天国でハイの両親や姉妹や友だちに会えるから」と語りかけ、「見守っているから」と思っている。⑦のように、「いつかまた会えますように」と、命あるものは自分も含めて死ぬということを認識し始めていることも分かる。また、自分たちのことも「見守っていてほしい」との願いを託している。ハイのことを「忘れない」気持ちを「本当に」「本当に本当に」「一生」「100 年後になっても」との表現をし、深い愛情を伝えようとしている。このことは、死後の世界へ旅立つハイへの精いっぱいの安心感を伝えたい思いとも考えられる。自分たちの中のハイがいつまでも元気でいてほしい希望を「天国に行っても元気でね」とつないでいる。これまでに、ハイに呼びかける情緒的な語りは幼児期と一緒に遊び楽しかった経験が生き続けているからであろう。

次に、この深い情緒的なつながりを育んでいる実態を、幼児期から筆者らのもとに残っている実践記録と繋いでみた（発達の視座）ものが表 2 である。前述のエピソードと対応できるように ep. と表記して番号をつけている。⑬の子どもは、私たちの記録の中には登場してこないが、よくシロやクロと遊んでいたこともののひとりである。別れを前にこれほどまでの思いの語りから、幼児期の飼育体験が貴重だったことをうかがい知ることができる。ここに取り上げたこどもが寄せたメッセージには、「ハイの分まで生きるから③」と、自分が育てている姉妹のウサギの言葉として語っていたり、「一生の宝物④」とハイに呼びかけたり、「一生忘れない⑤」「100 年後になっても忘れない⑥」との表現をしている。ハイに対しての愛情の深さが読み取れる。

表 2 5 年生の語りから幼児期まで振り返り

5 年生の 語り no.	3 年生	2 年生	1 年生	5 歳児
ミカ①	—	ep.7 お参り / 思い出話	ep.4,5 お参り / 呼び掛け / 可愛い	ep.2- ii 3.4 心配 / 意欲
カナ②	—	—	ep.4,5,6 お参り / 世話 / 自作絵本を贈る	ep.1 遊ぶ / 世話
リカ③	—	ep.8 手紙のお供え	ep.4 お参り	ep.1,3 誕生立会い / ミミと 名付け家庭飼育をしている
リノ④	ep.12,13 抱き気分転換	—	—	ep.1,2- i ii v 誕生立会い / 親密
ナルミ⑤	ep.13 気分転換	—	—	ep.1 遊ぶ
ユリア⑥	—	—	—	ep.2- iv 自作マフラーの贈り物

Ⅳ. 全 体 考 察

1. ハイとの別れ（死）が子どもに残したもの

小学5年生になって5歳児の時に会ったウサギとの思い出は、「一緒に遊んだ」こと「楽しかった」こととして想起している。抱き方が分からず、痛い思いをさせた相手の身になって「ごめんなさい」と謝罪する気持ちも表現している。5歳児だったころの体験を思い起こし語り、自分たちが今は5年生になっていることを表記して記名していたり、11歳と年齢を書いて記名したり、当時のさくら組とクラス名を表記したりする中で、時間の経過を表現しようと試みていることが分かる。ハイの成長とともに自分たちの成長も重ねているのである。「冷たく」「動かなく」なっているハイの亡骸を見つても、「天国」に行っても「元気で」と表現しており、自分の心の中に生き続けることを願っていることが分かる。死後の世界は、「怖い」と感じており、その思いを軽減するかのように「怖くないから」先に旅立った「お父さんやお母さんと姉妹や友だちに会えるから」と肯定的にとらえて安心感へと思いを転化しているように思える。そうして自己をコントロールしているのであろう。「天国」という概念もその思いの象徴ではないだろうか。このような実態から、こどもとともに死に立ち会い看取る場を、保育する教育現場で持つ意味は大きいと感じる。いのちに出会ってそのいのちと共に成長している卒園児にも、その死を告げてやること、見送る機会を設けてやることは大事な教育的意味があったと感じる。

2. 幼児期にいのちに触れる実践の方向性

教育要領に述べられているように、幼児期に飼育活動を取り入れることの重要性は、この実践研究からも明白である。が、その飼育活動は、好きな保育者の経験知にゆだねられており、指導の方向性は明確ではないのが現状である。保育は、保育計画のもとで実践が積み重ねられる。飼育活動についてもその経験が連続されるような保育計画が重要である。この実践は、後述の付表として掲載した計画のもとで進めたものである。

さらに、保育者が命を大事に育み継続飼育に惜しみなく愛情をかけて取り組む姿勢が子どもや保護者に大切な環境となることが本実践から実証されている。保育者の資質向上が問われるゆえんでもあろう。

Ⅴ. おわりに

ウサギの飼育は、本研究対象の2007年度5歳児が修了後も筆者や5歳児担任の先生と園児たちで引き継がれてきた。そのことは、就学後のこどもが、いつでも遊んだウサギに会いに来ることができ、当時のウサギの飼育の保育が楽しかったとの思いを振り返ることもできる。つまり、就学後も直接世話をすることはないが、彼らの脳裏に飼育は継続されているのではないだ



ろうか。飼育している幼児と共に飼育経験のある児童にとっても、いのちのつながり・人のつながりがある継続飼育は、意味のあるものと捉えることができる。ハイを亡くした5歳児のクラスには、こどもが作った花を飾りそれを囲んで元気だったハイの写真が飾ってある。思い出を大切に育み、命あるものを慈しむ保育者の姿勢が、こどもに影響を与えることは言うまでもない。死を受け入れ思い出を大事に育む保育は、おとなの生と死（いのち）に向き合う姿勢が大きく影響を与えると考える。

ハイとともに大きくなって修了した2年生から、自分たちが飼育しているウサギに赤ちゃんの誕生ニュースが、ハイを亡くしさびしい思いをしている5歳児クラスに届けられた。

今また、命との出会いが始まろうとしている。

付 表

教育課程及び保育計画にあるウサギの飼育 2007 年度 5 歳児

期		ねらい	子どもの姿・遊び（生活）
前 安定期	I 期	○新しい環境に関心をもつ、気の合う友だちと一緒に遊ぶ ○年長児になった喜びと自信をもつ ○自分のしたい遊びを十分に作る	・ 依存的、ねじれた仲間関係は意図的に2学級編成で分ける。自由形態の遊びでは学級枠を超え、親しい仲間関係で安定する ・ 進級し飼育当番開始、飼育物（ウコッケイ）への興味、関心が高まる
	II 期	○自分なりに考え、力一杯取り組む ○友だちとつながる、共通の目的をもつ ○身近な事象に触れ、よく見たり考えたり工夫したりする	・ 意図的グループで当番活動や生活を共にしつつ、もめながらも自己を調整し協力して事を進める喜びを味わう
安定期	III 期	○戸外で体を十分に動かす、友だちと一緒に考えたり工夫したりする ○課題をもち、自分の力でやり遂げる喜びを味わう ○身の回りの事象に関心をもつ	・ 園舎耐震工事に伴い、プレハブ園舎での生活開始 ・ K 幼稚園からウサギ誕生のニュース、相談しウサギをもらいに出かけ、皆で引継ぎながら子ウサギを連れ帰る ・ ウサギ部屋の中でウサギとこどもの生活、遊び場作りや、名前募集。好きな友だち関係とは違う顔ぶれが集う ・ 自己中心的なかわりから、ウサギの立場に立った表現へと変化する
	IV 期	○友だちとのつながりを深め、共通の目的をもつ、役割分担をする ○自然の変化に気づき、生活に取り入れる ○思ったこと考えたことをいろいろな方法で表現する	・ ハロウィンでの生活の中にウサギレストラン、ウサギのおばけ。積極的に遊び空間をもちながら他の遊びのこどもとも広がる ・ 歌「ウサギ野原のクリスマス」より、サンタヘウサギの手紙代筆 ・ 耐震工事終了、園舎引越し。さくら組保育室前テラスにウサギの家。ウサギを家族の一員として家族ごっこ ・ K 幼稚園へウサギの里帰り。ウサギを大切に思う園外の人の存在に気づく ・ 冬休みのウサギのホームステイ。家庭との連携をはかる

充実期	V期	○課題をもち、それに向かって活動を展開する ○自分のもてる力を友だちと協力して創り出したり考えたり表現する楽しさを味わう ○成長の自覚、入学する喜びと期待をもつ	・絵本「ウサギ」からウサギを気遣う声が出てくる。園庭でウサギの家づくり、それを基地に遊びが広がる ・砂場でウサギの遊び場作り。その様子を見て様々な友だちが集い、力を合わせ、役割分担しながら道作り。ウサギとこどもが共存する生活 ・こどもの手の中で赤ちゃんウサギ誕生。ケーキ作りやウサギの親子を気遣った看板や、母との毛布作り。 ・“こども劇場”の中でウサギになりながら出産の場面を表現する ・継続する中での飼育が充実、我が子を世話するような表現 ・就学に向かい小学校に連れて行きたい思い、赤ちゃんウサギの引き取り
-----	----	---	--

引用・参考文献

岩田純一 2001「〈わたし〉の発達」ミネルヴァ書房

中川美穂子 2007「〈相手の感情と身体〉を理解する脳をつくる」文部科学時報 pp.51-55

中川美穂子 2007「小学校における動物飼育活用の教育的効果とあり方と支援システムについて」

お茶の水女子大学 子ども発達教育研究センター紀要4：pp.53-65

鍋島恵美他 2010「ウサギとともに暮らす日々できごとから学ぶ-ウサギの飼育の保育を通して-」

京都教育大学環境教育研究年報第18号：pp.1-24

鍋島恵美他 2011「ウサギとともに暮らす日々できごとから学ぶ その2-ウサギ物語の語りから-」

京都教育大学環境教育研究年報第19号：pp.13-26

光村智香子 2010「継続飼育-教師と子どもと保護者とともに-」全国学校飼育動物研究会 Vol.14：pp.44-49

光村智香子 2011「ウサギとともに暮らす日々できごとから学ぶ その3-ホームステイの語りから-」

京都教育大学環境教育研究年報第20号：pp.55-63

幼稚園教育要領 2009 文部科学省

付記 本論文は、筆者らの先行研究で収録したエピソードを抜粋して分析している。